



## 東日本支部

### 東日本支部の生物工学教育活動 (1)

#### ～学生発表討論会～

大槻 隆司\*・鈴木 市郎

東日本支部では、次世代の生物工学に関わる人材を育む足がかりとなることを期待して、支部独自の企画である「学生発表討論会」というイベントを毎年開催しています。

学生発表討論会は、東日本支部所属の大学研究室の学生を対象に、合宿形式で膝をつき合わせて密度の濃い研究発表や自由討論を行い、他大学の研究者や学生、企業の研究者らと交流することで現在の研究や将来の職業、さらには人生観などに対する意識を高めてもらうことを目的として開催しています。この会は、学生が主体的に自己の世界を広げるための場を提供し、モチベーションアップを促すことにより重点を置いている点で、若手研究者の集い（通称若手会）の年次セミナーとは若干、趣が異なります。本稿では、東日本支部が重要な企画のひとつとして取り組む学生発表討論会の内容を以下に紹介します。

学生発表討論会は、「支部所属の大学間のもっと有機的な交流が図りたい」「最近の学生は元気がない」「産学連携の気運を研究だけでなく、長い目で見て日本の生物工学の将来を担う人材育成にも回せないか」といった支部委員会での議論を経て、平成18年度に試験的にスタートしました。年々変化する学生気質と、大学教員や企業研

究者の熱い思いをクロスさせる方法を試行錯誤しながら毎年開催しており、今年度で4回目を数えます。開催時期も、大学と企業の双方が参加しやすい時期を模索し、当初は9月末、8月末に開催しましたが直近2年は10月中旬で定例化し、今年度は10月16日（金）～17日（土）の2日間で開催しました。東京都八王子市にある八王子セミナーハウスにて毎年開催しています。大学教員と学生には参加費を頂きますが、より多くの社会人に来ていただき交流を持ちたいという観点から、企業・法人からの参加者からは参加費を頂いていません。学生は原則的に指導教員が東日本支部所属の学会員であれば、学生会員・非会員を問わず参加できます。これは、まだ学会発表をしていない非会員の学生にもこの学生討論会を通じて刺激を受け、学会発表につながるような研究内容の磨き方をしてもらいたいという考えによるものです。

学生発表討論会の基本骨格は、学生による研究発表会と、自由討論会の二本立てになっています。研究発表会では参加学生全員に10分程度で自らの研究内容を発表してもらい、発表と同じくらいの時間をかけて他の参加者からさまざまな質問・助言をもらいます。学会の本大会などとは異なり、「頑張っているのだけれども学会で発表できるほどデータが揃っていない…」というような内容も歓迎しています。一定の成果が得られていなくとも、他大学の教員・学生や企業研究者などからさまざまな視点の助言をもらうことで「井の中の蛙」から脱却するきっかけを作ることがひとつの大きな目的です。この目的から、研究発表会には相当の時間がかかるため、初日の午後と2日目の午前中は研究発表会に割きますが、それでも一人あたりの発表・討論時間を大きく削ることはしたくないので学生定員は最大20名程度に限定せざるを得ないのが悩みです。

初日の研究発表会の前には、経験豊富な企業研究者や大学教員の方に学生を激励する基調講演をお願いしています。これまでは、

「バイオの先輩から後輩へ」 神奈川工科大学工学部教授・松本邦男氏（平成18年度）

「学生からのスケールアップ」 キッコーマン株式会社研究開発第4部・今井泰彦氏（平成19年度）

「我々は何処から来たのか 我々は何者か 我々は何処へ向かうのか」 味の素株式会社研究開発企画部・松井和彦氏（平成19年度特別講演）

「医薬品の製法開発とバイオテクノロジー」 エイキバイオテックコンサルタント・永木英雄氏（平成20年度）

「旭硝子におけるバイオ事業～異業種企業におけるバイオ研究とバイオ事業の創出」 旭硝子株式会社ASPEX事業推進部・磯合敦氏（平成21年度）



\* 著者紹介 山梨大学大学院医学工学総合研究部工学部生命工学科（助教） E-mail: tohtsuki@yamanashi.ac.jp

の各氏（いずれも所属は当時）に講演を頂きました。各氏とも、30分という短い時間の中でご自身の経験に基づく研究観、人生観を苦勞話も交えてお話し下さり、学生諸君に熱いエールを贈ってくださいました。質疑では学生からも研究のとらえかたに関する質問などが活発に出て、各自の将来を考える良い機会となっています。

基調講演のあとは学生による研究発表会です。ふだん接する機会の少ない他大学研究室の学生の研究発表を、学生が相互に座長もつとめながら発表会を進行します。質疑応答に十分な時間を割き、企業・法人からの参加者には研究の背景や研究が目指す最終の目的、研究方法の選択など、学生一人一人の研究に対する姿勢にまで突っ込んだ議論をお願いしているので、発表に対してかなり厳しい意見がでることもあります。学会発表の経験がない学生も少なくない中、学会以上に深い議論のなされるこの発表会は、実施後のアンケートでも多くの学生が「考えたこともない見方がいろいろあって大変参考になった」と振り返っており、「井の中の蛙からの脱却」に一役買っていると思われる。

1日目の研究発表会は夕刻で終了し、休憩・夕食をはさんでもうひとつの重要なイベントである自由討論会が開かれます。自由討論会の大きな目的は、企業や法人、大学などの社会人研究者と自由に話すことで、学生が企業などで「プロの研究者として」必要とされる能力や研究の心得などさまざまな事柄について、先輩たちの経験や知識に触れる機会をつくることにあります。参加学生の多くはこれから就職活動を迎えますので、社会人研究者との交流を通じて将来の自分自身の有り様を考えるきっかけとしてほしいと願っています。

自由討論会では、先輩たちの経験や知識に触れるという目的から最初に話題提供として毎年さまざまな試みを行っています。参加社会人全員に一言ずつアドバイスをもらうパネルディスカッションのような方式、自分の所属組織の紹介形式、事前に学生から社会人に聞いてみたい質問を募り、それに社会人参加者が答える方式など、毎年なんらかの話のきっかけを作り、その後フリートークに移行するという流れで交流を図っています。毎年、社会人側の熱意が強すぎるあまり話題提供に割く時間が長くなる傾向にあるのでフリートークの時間を確保するのに苦勞するほどです。自由討論会は22時頃で中締めとなり、その後は宿泊室に場を移して語り足りない者が夜更けまで語り合います。参加くださった社会人の方々はみな非常に親しく本音を語ってくださり、ここでしか聞けない話が出ることもしばしばです。事後アンケートでは特にフリートークの場で「企業の方々や教員からふだん聞けない話がたくさん聞けた」と好評を博しています。

減多にない貴重な機会ですので、参加された学生さんたちには、ぜひこの場を有効活用して自分磨きに役立てて欲しいと切に願います。

2日目は午前中いっぱいを使って研究発表会のつづきを行います。前夜遅くまで語ったにもかかわらず、朝から再び熱い議論が交わされます。研究発表会が終わると、昼食をとって昼過ぎの解散となります。

これまでの4回の開催における参加者数は平成18年度31名（教員6名、企業2名、学生23名）、平成19年度22名（教員6名、企業4名、学生12名）、平成20年度35名（教員7名、企業7名、学生21名）、平成21年度30名（教員7名、企業8名、学生15名）となっており、支部委員の方々の努力もあって年々、企業・法人からの参加者が増えています。また、学生・教員も国公私立にわたり10を超える研究室から参加するようになっており、東日本支部でも重要な企画のひとつとなっています。来年度も開催を予定しており、支部ホームページなどで告知していきますので、東日本支部の学生、ならびに企業や大学の方々ぜひご参加ください。また、本学生発表討論会は東日本支部の企画ではありますが、「どのようなものか覗いてみたい」「我々の支部でも検討したい」など、他支部の方のご参加も歓迎いたします。ご興味をお持ちの方は筆者までご連絡いただければ幸いです。

学生発表討論会を開催してやはり感じることは、すでに多方面で問題として取り上げられている学生のコミュニケーション能力についての問題です。これを向上させるには、異なる世代、異なる所属の人と交流する機会を、可能な限り積み重ねるしかないと考えています。

学生発表討論会が、これから日本の生物工学界に羽ばたく学生さんたちの将来に少しでもプラスになること、そして社会に羽ばたいた若い世代の皆さんが再び戻ってきて後輩に自分たちの経験や考え方を伝える場になることを期待します。

